

はじめに

名古屋大学が、本日ここに、トヨタ自動車工業株式会社並びに豊田家御一家の絶大なる御好意に浴して、かくも立派なる講堂の建設寄贈を受けたことは、名古屋大学は勿論のこと、日本文化のために慶賀にたえぬことであり、感謝感激の至であります。

右の文章は、一九六〇（昭和三五）年五月に挙行された豊田講堂完成式典において配布されたパンフレット『名古屋大学豊田講堂 一九六〇』の冒頭に掲げられた、勝沼精蔵によるあいさつ文の一部です。勝沼は、一九四九年七月から一九五九年七月までの一〇年にわたって名古屋大学の第三代総長を務めた人物です。豊田講堂完成式典が行われた時、勝沼はすでに総長を退任していましたので、右のあいさつ文は名古屋大学前総長という肩書きで記されています。

ところで、国内の歴史ある多くの大学には、その大学を代表する建築物や記念物などがあります。たとえば、北海道大学の農学部建物、東京大学の大講堂「安田講堂」や赤門、京都大学の時計台記念館、早稲田大学の大隈講堂、慶応義塾大学の図書館旧館や三田演説館、同志社大

学のクラーク記念館など、重要文化財等の指定を受けているものも少なくありません。

名古屋大学の場合、東山地区のシンボリックな建物といえば、やはりキャンパスの中央部分に並び立つ豊田講堂と旧古川図書館（現在の博物館）ということになるのではないのでしょうか。これらの二つの建物については、すでに名大史ブックレット4『豊田講堂と古川図書館―名古屋大学の寄付建物―』（堀田典裕・木方十根共著、二〇〇一年）において、主に建築学的な角度から詳細に取り上げられています。

本書では、これら二つの建物のうち前者の豊田講堂について取り上げたいと思います。その際、同ブックレット4の内容との重複をできるかぎり避けながら、豊田講堂が名古屋大学に寄付された経緯や名古屋大学における同講堂の存在意義などに焦点をあてて紹介していきたいと思えます。

また、増補版においては、名古屋大学創立七〇周年（創基一三八周年）を記念して実施された、二〇〇七年一二月竣工の、豊田講堂の改修・増築工事の概要や竣工後の様子について新たに書き加えました。

さらに第三版では、国の登録有形文化財としての登録及びBELCA賞の受賞（二〇一一年）、公共建築賞・特別賞の受賞（二〇一二年）といった、最近のトピックスについての記述を増補しました。